

「日本文学のなかの障害者像 近・現代編」

花田 春兆編著



私事になるが、ある文学賞を受賞したとき、「そつとつ病」に対する偏見を助長する表現」とし、部分的に指摘されたことがある。出版社に実際に躁鬱病の方がおられ、実体験からくる丁寧な説明と提示を受けた。そのとき思い知ったのは、書く方にどんな狙いがあるかと、書かれる側に受け入れられなければ、何を表現しても無効であるということだ。それ以後、そつとつというテーマを扱った書はないかと気にしていたおり、この本と出会った。

執筆者二十八人は、障害者自身、もしくはかかわっている人々だ。明治から現代まで描かれてきた文学作品の中の障害者に対する表現を評し、時代を読み解こうとしている。各五〇程度。完成、完結を目指した研究報告書でなく、あくまで次のステップへつながら中間レポートくらいに思っていたきたいと、あながきにも述べてある。

なかでも障害者自身の書いた小説は、やは

当事者の立場から読み解く

り印象的だ。片足切断した素木しづの『松葉杖をつく女』、ハンセン病患者であり、昭和初頭の隔離療養所の生活を見つめた北條民雄の『いのちの初夜』、精神障害の孤独を描いた小林美代子『髪の花』など、世間にあまり知られていない本の紹介もある。

また著名ものでは村上春樹の『ノルウェイの森』、大江健三郎『静かな生活』とつづぐ。だが大江の場合、『新しい人よ自さめよ』の主人公の強い意志はなく、作者がなぜ、今さら障害をへ乗り越えるものとしてとるのか疑問に思う、と手厳しい。

庄巻は正岡子規だろう。短歌だけなら、脊椎カリエスで寝たきりになった後の方が数段力強く、大きくなっていると、布団の上から自己を主張し、自分でありつづけた子規の姿は、「人に迷惑をかけない」「何でも自分でやる」を建前にした現在の障害者教育とはかけ離れ、本来、合理性におさまるはずのない、障害者の実像と人間らしさが感じられるというのだ。ただ、枚数のためか、全体に論の薄さが惜しまれる。次はぜひ、この中からより厳選し、徹底し論じてもらえればと期待したくなってくる。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

◇はなだ・しゅんちょう 1925年生まれ。脳性まひで四肢・言語に障害がある。身障者同人誌「しののめ」創刊。著書に「日本の障害者」など。